

野鳥の中でも特に身近に感じられる「ハト」ですが、種類によってその生態も異なります。今回はハトの中でもちょっと珍しい種についてのお話です。

幸せの青い鳥事情

ケガをして運びこまれるハトには、ドバト、キジバト、アオバトがいます。ドバトやキジバトは、人間の管理下に置かれても治療やリハビリに耐えて野生復帰に期待は持てますが、臆病なアオバトの管理はとて難しいのです。ドバトは身近にいる鳥で、家畜化*1もしているのを恐れていません。キジバトも里山から下りて人家の庭木の実などを食べに来ている姿が目撃されるので、逃避距離*2は短くなってきています。

いっぽうアオバトは、万葉集や遠野物語に登場することがあり(種の特定には諸説あって特定されている訳ではない)、昔からわが国に棲息している鳥であるにもかかわらず、生態の一部が知られるようになったのはつい最近のことで、いまだに謎が多い鳥なのです。

最近3年間のアオバトの搬入状況を表に示します。

No.	傷病原因	救護地	救護時期	野生復帰
1	原因不明	郡山市久留米	11/3	
2	他動物襲撃	郡山市桃見台	10/23	○
3	他動物襲撃	広野町下浅見川	10/12	
4	他動物襲撃	郡山市本町	10/28	
5	原因不明	会津坂下町	10/10	
6	原因不明	郡山市富久山町	10/18	
7	他動物襲撃	郡山市大槻町	10/30	
8	他動物襲撃	郡山市字原中	11/8	
9	原因不明	福島市大森	10/8	
10	交通事故	郡山市開成	10/21	
11	原因不明	郡山市田村町	10/29	
12	原因不明	福島市八木田	11/15	
13	他動物襲撃	いわき市泉町	11/2	○
14	他動物襲撃	いわき市錦町落合	11/9	

アオバト



出典：京都府レッドデータブック

森の中でひそかに生息していると思われるこのアオバトが、市街地で頻りに救護されることが多いのに気がきます。幸せの青い鳥のモデルとも言われるアオバト。童話では、幸せの青い鳥を探しに森深く兄妹が探しに出かけ、本当は身近にいたのだというのが落ちですが、現実も身近に居たんですね。

市街地に降りて来る理由は、公園や庭木の実が目当てでしょうか？救護時期も夏の終わり、秋口に入っています。救護に至る原因が、原因不明なものは目撃情報が無いので分析できませんが、他動物襲撃のほとんどは、ペットによるものです。山から下りて来たものの、市街地における危険動物の認識が確立していないのかも知れません。

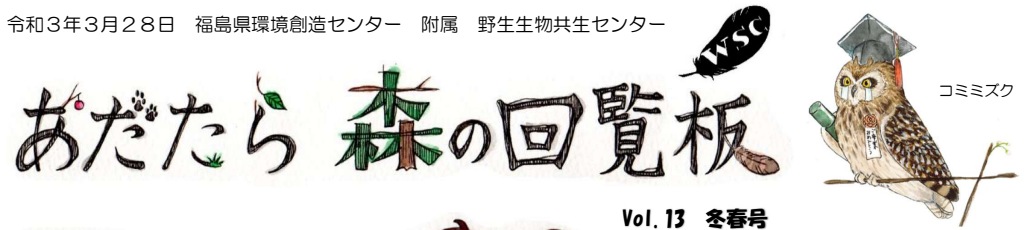
表に示すように、アオバトの救護例14例のうち野生復帰したのはたったの2羽です。ケガの状態によっては、亡くなってしまふ個体も少なくありません。

とても臆病なこの鳥は、初期治療又は看護期間に死亡する事例が多いです。これをどう改善するかは、私たちの課題なのです。

※1 元々食用や伝書バト用に飼われていた個体(家畜)が野生化したと言われています。

※2 人が近づいた際、鳥が危険を感じて逃げ去るまでの距離のこと。

令和3年3月28日 福島県環境創造センター 附属 野生生物共生センター



【環境学習会を実施しました～その2～】

野生生物共生センターにおいて、昨年8月から10月にかけて親子参加型の環境学習会を実施しました。計4回の学習会を開催し、前号においては第1、2回目の内容をご紹介させていただきました。本号では後半3、4回目の学習会についてご紹介いたします。4回目などは小学生低学年の方々には少し難しい内容だったかもしれませんが、皆さん真剣に耳を傾けていました。



第4回学習会において、昆虫の生息状況を調査する機械を体験する様子(昆虫がセンサーに触れると反応する機械)

野生生物共生センターでは、野生動物の剥製やパネルの展示、映像放映等をおこなっており、入館料無料で自由に見学・閲覧できます。事前にご相談いただければ、団体でのご利用や職員による解説などの対応も可能ですので、興味をお持ちの方はお問い合わせください。

詳しくは... [HP](#) [環境創造センター](#) [検索](#)

発行: 福島県野生生物共生センター
〒969-1302
福島県安達郡大玉村玉井字長久保67
電話 0243-24-6631
開館時間 9:00~17:00
休館日 毎週月曜日
(祝日の場合はその翌日)



本誌内の文章・画像等の無断転載および複製等の行為はご遠慮ください。

環境学習会

第3回 「探鳥会を通して身近に生息する野鳥について学ぼう」



10月11日(日)は日本野鳥の会郡山支部長の熊谷建一先生ら野鳥観察の専門家の方々と一緒に、フォレストパークあたらの散策路にて探鳥会を行いました。当日は小雨の降る中での探鳥会となり野鳥の姿を見ることはあまりできませんでしたが、鳴き声や生活の“あと”など、注意深く観察しないと気づかないような野鳥の生活の痕跡を専門家に教わりながら散策しました。また、野鳥だけでなく植物についてのお話いただきながらの散策となり、数多くの動植物が身の回りで生活しているということ

を改めて実感できる体験となりました。あいにくの天気ではありましたが、生物多様性について肌で感じることができる学習会となりました。

第4回 「クマと人間の共存、絶滅危惧種(トキ)の復活について学ぼう」(テーマ1)

「震災による野生生物への影響について学ぼう」(テーマ2)

10月18日(日)は、福島大学食農学類の望月翔太先生(テーマ1)と国立環境研究所の玉置雅紀先生(テーマ2)による座学中心の学習会を実施しました。

～テーマ1～ 「クマと人間の共存、絶滅危惧種(トキ)の復活について学ぼう」

日本に生息する2種のクマのうち、本州に分布するツキノワグマは、本来生息するはずの山と人里の境界があいまいになってきているなどの影響で、近年住宅地での目撃例が多発しています。多くの地域で安全確保のために捕獲駆除を実施している一方で、過剰捕獲を指摘される地域もあり、特に西日本や四国、青森では絶滅のおそれのある地域個体群に指定されている現状にあります。

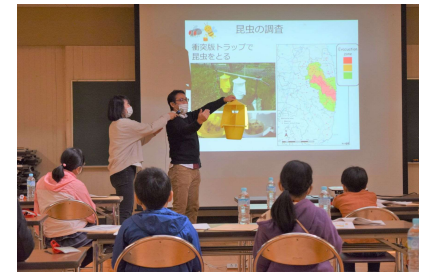


絶滅の危機におちいった種の復活はトキの事例が有名ですが、トキのように絶滅寸前となった種を再び自然で復活させることは簡単ではなく、できたとしても大変な時間と労力がかかります。クマに限らず、元来人と野生動物は生息地を分け共存してきた存在です。お互いが関係し合い生きていることを受け入れ、自分たちが生活していく環境を整備していく必要があるのではないのでしょうか。

～テーマ2～ 「震災による野生生物への影響について学ぼう」

福島第一原子力発電所事故による放射線の影響で、現在も人の立ち入りが制限されている地域があります。それらの地域では、人が住まなくなったことで土地の管理がされず農地や公園が雑草でおおわれてしまうなど、生活の変化が環境に大きな影響を与えています。このような地域の野生動物や昆虫の生息状況を調査したところ、イノシシやウグイス、ホトトギスといった普段の生活で人の目に触れることの少ない動物が多く見られ、カラスやスズメ、ツバメといった身近に見られる動物の数は逆に減っているとの結果になりました。

人口減少や高齢化、都市部への人口集中などにより、2050年には全国の約20%の地域で人が住まなくなるといわれています。放射線の影響で人がいなくなった地域は、これらの地域とよく似た環境であり、そこで行う調査研究はこういった地域がどうなっていくかを予測することに役立ちます。調査に実際に使用した道具を用いて、体験しながら環境について考えていただく機会となりました。



業務紹介コーナー



～令和2年度環境学習会&施設紹介の動画を公開しました～

前号で紹介した第1回、第2回を含めた令和2年度に開催した環境学習会について、各回の様子及び内容をまとめた動画を公開しました。ご家族でご覧いただき、環境について考えるきっかけとなれば幸いです。

また、本広報誌を発行している「野生生物共生センター」の紹介動画も併せて公開となっています。野生生物共生センターとはどのような施設なのか、またどんな業務を行っているのかを知っていただくために作成した動画になります。動画を見て興味をお持ちいただけたら、是非実際にセンターに足を運んでみてください。

本会議に思ったり、展示内容をもっと詳しく知りたいときは職員に声をかけてね。職員が館内を案内するよ!



あだぼん

施設では新型コロナウイルスの感染防止対策を徹底しているよ。みんなで協力して楽しく見学しよう。

各動画は以下福島県環境創造センターのYouTubeチャンネルからご覧いただけます



<URL>
<https://www.youtube.com/channel/UCKTG4IOMAu62AZrmu9cWryw>



<QRコード>



今後も動画を投稿していくよ! チャンネル登録してみよう!!

リスティーン



ご意見募集中!

館内展示の充実や今後のイベント検討のため、皆さまのご意見を募集しています。こんなイベントに参加してみたい! 東日本大震災が野生生物に与えた影響についてもっと詳しく知りたい! など、ご意見を館内のアンケートにてお聞かせください。アンケートをご記入いただいた方には、野生生物共生センターオリジナルのグッズをプレゼントいたします。

※当該プレゼント企画は予告なく変更・終了する場合があります。